

児童教育を支援する「博報財団」が、すぐれた取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

国語・日本語教育部門

埼玉県 ● 特定非営利活動法人街のひろば

言葉の壁を
取り巻く問題に
長年取り組む団体

金の3日間、小学生は放課後、中学生は夜間に学習支援の場を提供している。

埼玉県の在留外国人は、およそ16万7000人（平成29年12月末現在、法務省発表）で、全国で5番目に多い。

「ただいま！」
15時過ぎ、埼玉県入間郡三芳町にある藤久保公民館の一室に、ランドセルを背負った子どもたちが続々と帰宅してきた。迎えるのは、外国につながる子どもたちの学習支援を無償で続けている「街のひろば」のボランティアだ。ランドセルを下ろすやいなや、どの子どもも家に帰ったような、リラックスした表情を見せる。

「1997年に活動を始めた当初は、地域在住の外国籍の大人の方のための日本語教室でした。その中で『来年少もを母国から呼び寄せるんです』という話題が出ることも多く、翌年からすぐに子どもたちの支援も始めました」と語るのは、同法人の梶加寿子理事。草創期から外国につながる家族の支援に尽力してきた。

1997年から20年にわたり、日本語を母語としない児童生徒に向けた日本語指導員派遣事業に取り組んでいる「街のひろば」は、2007年小・中学生を対象に「子ども学習広場」を開設。毎週月・水

来日後、子どもたちの多くが公立の小・中学校に転入するが、日本語が全く話せない場合、日本人児童生徒と同じ授業についていくことは難し



日々の宿題から高校受験対策まで、子どもたちのサポートを担うのは、大学生や主婦などを中心としたボランティアの先生たちだ。

日本語を母語としない児童生徒への 教育的・精神的・経済的な支援を通し 言葉によって育まれる子どもたちの未来

日本語がわからない外国につながりを持つ子どもたちの
学習支援と居場所づくりに尽力してきた取り組みに、博報賞が贈られた。

い。梶さんたちは、そうした児童生徒のために、他の児童生徒が通常の授業を受けている間、教室とは別の場所ですべての基礎を教える、いわゆる「取り出し授業」を続けてきた。

「言葉は生きるための武器
日本語学習支援が育む
子どもの未来と可能性」

「三芳町は小さな町なので、各校に対象の児童生徒が5人未満の場合が多く、どうしても制度の網の目からこぼれ落ちてしまいます。10人でも1人でも問題は同じなのですが……」（梶理事）

必要となる。そこで、同法人では、放課後や夜間にも学習を支援する「子ども学習広場」を開設するに至った。

「言葉は自分の感情を伝え、自己表現をするうえで、もっとも重要な道具です。言葉が育てば、先生や友だちに率直に自分の気持ちや悩みを伝えられ、より深くつながることができるよう。言葉を持つことは、生きるうえで最大の武器になると信じています」（松浦理事長）



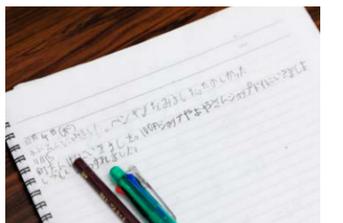
大学3年生の村上高尚さん。後輩のサポートにも参加している。



生活言語の習得に1年半～2年、学習言語は7～8年かかる。そのため小学校低学年からの指導は必須。



「街のひろば」理事長の松浦康介さん。



非漢字圏の子どもにとって、社会・理科などの用語はかなり難しい。

推薦者 お祝いのことば

この度は博報賞の受賞、誠にありがとうございます。「街のひろば」と三芳町とのつながりは深く、長年にわたって日本語を母語としない児童生徒を学校の内外でサポートしていただけてきました。地域に根ざした活動は、学習面、精神面で大きな効果を上げ、日本語に触れた経験が少なく、言葉に不安を抱えた子どもたちに夢と希望を与え続けています。今、在留外国人の数も増えている現状で、「街のひろば」のような活動に対して社会的ニーズが高まっています。是非、今後も明るく生き生きと地域で暮らす子どもたちを育てるために三芳町を応援していただければと思います。

三芳町教育委員会

古川慶子 教育長

「来日直後は、学校の先生にさされると泣いてしまっていました」と語るが、「大学生活は毎日が刺激的。将来、やりたいことがたくさんあって、困っています」と未来を語る。そんな彼に泣きそをかわいていた少年時代の面影は見つけられない。

「いまの僕があるのは、多くのボランティアの皆さんに出会えたから。僕も後輩たちのサポートをしたい」と話す。自分の思いを真っ直ぐに、かつ筋道を立てて話す彼の姿は、同法人の長年にわたる成果の確かな証である。